

John Stokes and Mark W. Turner, editors.  
*The Complete Works of Oscar Wilde:*  
*Volume VI: Journalism I and Volume VII: Journalism II*  
Oxford: Oxford University Press, 2013.

---

庄子ひとみ

---

本書はOxford University Pressが発行している*The Complete Works of Oscar Wilde* シリーズの第6巻および7巻、1877年から1890年までワイルドが定期刊物に掲載するために執筆した(あるいは、そう推測される)評論を網羅した全集である。

当時活躍した文筆家の多くがそうだったように、ゆくゆくは一冊の著書を刊行するという計画に基づいて批評や小説を執筆し、定期刊物に掲載するという手順は珍しくない。ワイルド作品研究およびヴィクトリア朝後期の出版文化研究においても多大な貢献をしている編者のジョン・ストークス(John Stokes)とマーク・W・ターナー(Mark W. Turner)は、このような時代背景についても十分に考慮した上でこの仕事に取り組んだ。ワイルド著とされる膨大な量の初出記事や原稿から収録すべきものを選出し一貫性のある全集を完成させるため、*Journalism* はワイルドが後日書籍として再出版しなかった短い評論であり、*Criticism* はワイルド自身によって、あるいは彼の死後に第三者によって一冊の本として刊行されたより長めのエッセイや批評であると定義し、本書に収録されているのは前者であるとしている。

ワイルドのジャーナリズムを纏めたものとしてはロバート・ロス(Robert Ross: 1869-1918)によって*Collected Edition: Reviews and Miscellanies* (London: Methuen, 1908)がすでに発行されており、これまでワイルド研究において参照されることの多い資料のひとつだったが、本書との違いは何か。まず、本書には初めて「ワイルド作」と確定されたテキストが相当数含まれている。1877年から時系列に収録している構成はロス版と同じであるが、驚かされるのは二巻に分割され刊行さ

れた(Iは430頁、IIは622頁)本書のボリュームである。それは単に収録されているワイルドの原稿が増えたというだけではなく、編者の二人によって注意深く検証され詳細に付された膨大な量の注釈によるところが大きい。実際、ワイルドのテキストよりも編者の註が長くなっている箇所も少なくない。

ワイルドの代表作とされる小説や戯曲、批評集は大部分が1890年代に集中して出版されていることもあり、文学史においてもヴィクトリア朝世紀末「1890年代」を象徴する存在として君臨してきたワイルドの1880年代あるいはそれ以前の文章は相対的に少ない印象が否めなかった。しかしその印象は本書によって覆されることになる。ワイルドは定期刊行物から本へと発表の舞台をうつすただけのことで、キャリアの早い時期から精力的に様々な対象をとりあげて論じ、その筆を休めることなどなかったのだということが確認できるからだ。ワイルドとジャーナリズムといえば*The Woman's World*編集長のキャリアが真っ先に浮かぶが、そもそも1887年にこのポジションを引き受けるきっかけとなったのもワイルドが*Pall Mall Gazette*に発表していたファッションや室内装飾についての記事を目に留めたWemyss Reidが声をかけたからであり、ワイルドの文才は*The Woman's World*以前にも、定期刊行物で大いに発揮されていたのである。

そして、本書の特徴として最も注目すべきは‘Journalism’と‘Journalism Dubia’の項を分けて掲載したことだろう。これは、ロス版との最大の違いでもある。ワイルドによるテキストと確証がとれている「ジャーナリズム」と、ワイルド執筆と確定するには大なり小なり疑問がのこる「Dubia(疑義あり)」に分類し、その根拠も丁寧に註に記している。たとえば*Pall Mall Gazette*に1887年2月17日に掲載された評論‘The Poets and the People’を参照してみると、著者名はワイルドではなく‘By One of the Latter’となっている。一見ワイルドが書きそうなタイトルかもしれないと思いきや、ストークスとターナーは「ワイルドにしては陳腐なアイデアに満ちていて声高に修辞を用いる方法も疑わしい。そもそも普段は常に何某かの敬意を払っていたはずの詩人を名指ししてこのような極端な判断をすることはワイルドらしくない」(556)と分析し、*The Oscar Wilde Encyclopedia* (New York: AMS Press, 1998)を監修したKarl Becksonの「これはその他のワイルドによるとされる評論とはかなり異なる内容ではないか」(277-8)という指摘も紹介した上で、ワイルドの著作とするには疑いがのこると判断、最終的にDubiaの項に分類しているのである。このように、ストークスとターナーは収録されている短い記事ひとつひとつの初出情報を含めた出版背景のみならず、ワイルド作品の研究者としての自分たちの見解、そしてそれを検証する材料としての先行研究を紹介した上で

(出典は必ず明記されている)、注意深く註をつけ分類している。この註だけでも、ひとつの研究書として成り立つだろう。

最後に、ロスによる *Miscellanies* (1908) と比較して本書最大の功績といえるのは、ロスが意図的あるいは無意識に修正、あるいは削除したワイルドのテキストが可能な限りオリジナル(初出記事、あるいはワイルドの原稿そのものを確認できた場合は原稿)に戻されて掲載されている点だろう。ロスがワイルドの死後、そのテキストに手を加えて出版していることは周知の事実だったにもかかわらず、それら全てを検証し、オリジナルと比較参照できる資料はこれまで出版されてこなかった。過去に出版された Anya Clayworth の *Selected Journalism* (Oxford: Oxford UP, 2004) や Merlin Holland 版 *Complete Works of Oscar Wilde* (London: HarperCollins 1948) も含めた複数のワイルド選集・全集との差異も細かく検証し、ロスによる修正も削除も可能な限り指摘し、そのうえでひとつひとつのテキストをワイルドのオリジナルに戻した労力は、ワイルドの熱心な読者であり、かつヴィクトリア朝世紀末の出版事情、特に定期刊行物研究の第一人者として資料収集の困難や問題点を常に意識していたストークスとターナーだからこそ可能だったのではないだろうか。

Part II の巻末に収録されている付録には ‘Amiel and Lord Beaconsfield’ が掲載されていて、これは 1884 年に英国で行った衣装についての講義の原稿をワイルドが手直したのではないかとされている。アメリカの William Andrews Clark Memorial Library 所蔵で、鉛筆で 7 枚に渡って書かれていたワイルド直筆の草稿ということだが、「ワイルドが鉛筆で X をつけて消した箇所は省略した」(580) の、それ以外はすべて収録されていると註がついている。些細な箇所も丁寧に検証してから収録するという手間を厭わない、誠実な研究者であり編者としての姿勢は、本書に一貫して認められる。

本書は当初の予定より刊行が大幅に遅れたことでも注目されたが、頁をめくるとその理由も納得出来る、想像を超えた時間と労力を要する仕事であったことがわかる。ワイルドが活躍したヴィクトリア朝後期の英国は、読み捨てられる類の媒体、定期刊行物 (Periodicals) という大量印刷物が流通したからこそ、その舞台を利用して数多の才能が現れ、掲載する文芸雑誌は創刊されては消えていった。短い断片のような記事は、後に一冊の本として刊行されていないかぎり初出記事へのアクセスも容易ではない点が課題だった。ワイルドのように死後出版が第三者によって修正が加えられたいと知っていても、その事実を半ば仕方ないと承したまま多くの読者が読まなければならない状況が 20 世紀だったのだとす

れば、21世紀は分散していた過去の雑誌記事を収集、保存し、デジタル・アーカイブで参照可能な時代になっている。その発展にも助けられつつ、本書のように初出記事に施されていた加筆修正や削除の形跡を丁寧にたどり、オリジナルに戻す作業を担った編者の苦労は、知的財産の保護という観点からみても、世紀を超えて著者ワイルドの名誉回復に貢献していることは間違いない。

「ジャーナリズムは今や読むに耐えないし、文学は読んでもらえない」‘Journalism is unreadable, and literature is not read.’と‘The Critic as Artist’(1891)に書いたように、*Woman's World*を去ってからのワイルドは、最終的にジャーナリズムに、とりわけ大衆に迎合し低俗化したNew Journalismに失望したのではないかと思われる。(あるいは、週に二日の編集部定時出勤と週6ポンド定額の給与体系に嫌気がさしたのかもしれないが。)しかし本書で鮮やかに浮かび上がってくるのは、ジャーナリズムが短期間で幅広い読者へアピールできる宣伝効果に目をつけ、関心を抱いた対象について自由に論じ、自らの「天才」を披露する場として、とりわけ1880年代には新聞や雑誌といった定期刊行物を積極的に利用していた「ジャーナリズムの徒」ワイルドの姿である。

そして本書は同時に、Periodical Studiesという分野が今後学際的に発展していく可能性をも提示してくれた。匿名や複数のペンネームを用いて執筆されることも多かった19世紀のジャーナリズムを扱うに際し、執筆の根拠が疑わしい記事を掲載する上で‘Dubia’の項を別につくり、註をつけるというスタイルはこれまで様々な形で紹介されてきた同様の資料と比較しても、明快で研究資料として信頼できる。今後も同様の選集・全集が刊行される際に採用されるべきで、本書の刊行はジャーナリズムを纏めて出版する際の雛形となるスタイルを提示してくれたという点でもひとつの達成といえる。